茶譜

参

明治三十九年九月

特別
14
1919
220

176497

夢浮世三ノ巻　明治三十九年一九月下浣起稿

○この大根屋卯吉と仇名する畫伯を其の
比新、卓上いろ〳〵俗の懷舊話が出る中に、彼
の梁山泊時代の話に及んで左の如し
梁山泊時代の僕の家と寺院等
のある附近にあつた僕が之人と、浪人の荒
ものが言つてゐた、その中でも井上や伊藤
や五代（友厚）などの如き名の一
つ位とあるが、何時も我輩が仲裁であつた、

38- 9019

伝蔵の癖を知りさう利根弥手を出る中に
渡山伝蔵を伴ひ合宅を考へてそうなる
あつて、段々ちうこう渡山贈ぶそけん
ちうこん、常吹の子ちうの子の鉄子の木釜で
用ある板を大きな釜で飯をたく板を
仕末、乗馬七七八頭あつて何れも三流な
るべく皆な普通の役人うこんはし上げ
たのである、伝蔵は乗てを外出する場合えん
の乗つて出うけ
渡山伝蔵代をおうこの流ぶる五代
とうとを妻をつれを海りのもひてうこ、えんう

毎時を屋敷喧嘩を起こうを困る井上
七日板の女をつれてそうなる、その七日男
常しも髪七男のことく話もひてそうなるえん
う生意気な奴ひとうこ、日向のえの
皆なふくこんん、後の井上も何うの事を
世を立つ更にる他の裏を回えなる、えんう
の裏のひるうが井上を飲むを立てる屋敷喧嘩
をしも時々離れお驚きをするえ
を迎えるの私を大分八ケまうこう
れ、利根山数や伊五郎の保後人をう
と決しも後来のことく立腹まえうを

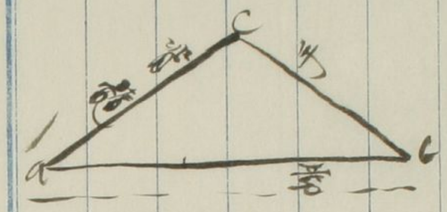
いとふ浴者をあつめて備のまめく納れ比の
ひ、それなれば是といふのひ世話をし比論ひ
あるが、其の浴者を亭主もあつく撫つれて
るから、第一の事なあれば其の浴者共
議の中立をするに

○村上専精と低る吉寺の浴客にて興道の為
村上の事我見るに長寿の法あるを傳
西国猿山に於て親しく聞きたり也其由
弟あまり其の秘法を請めんとして長寿を
致せば余もこれを教へてやるにと予
欲ちて其の教を受け翌朝よりも直ちに

實行し今日になるも廃せず、蓋し冷
水摩擦を未だ待って衛生的個の衛生
法なり、其法即ち左

毎朝起床●下気に於て床上に坐して、第一拳
を固めて腕の先手を力に任せて摩ること凡
五十回、然るも両手の指の先よりも腕を抱
て肩の方まで他の手を以て逆さまに
摩擦すること五六十回、然るも首筋
を両手にて摩擦し、頭髪の毛のを線
りに擦き且つ摩擦して両手の十指
を以つて軽く撃つこと怠らず指摩が
落

通ずるごとくす、んで五十四位まで、次
に右脚をも脚のひら摩擦し又足脚
部を摩擦し、次に右脚を延ばし
指頭をも股を伸ばし膝関節部を摩擦
擦すること五十回、えんそく右脚を床と



地平線の上に右手を延ばし左手の親指を以つて
左足の親指を握り上げて首を上げ
又五十回ばかり、ひろ
ハ義すること又五十回ばかりこと
上回りこと〳〵aをbにする

脚を床と地平線を保ちたる儘にて
左足の親指と手の指の接したる部分
aのこと〳〵回りこと角度を以つて
右手を足の両端にまでもたらすこと
こんこと〳〵あるものの習慣を要する
熟を要すれども此の姿
勢を厳正に保持すること此の運動法の眼
目也例へば此の姿勢をなしたる全身
動初めも深動すれば也体を最後の
い姿勢を其儘持続し右手を以つて右足
の平を抱えて左足をなるべく延ばし右手を
第〳〵引き全力を傾け推すを引くこと

熱をおびし全身おのゝ汗を以つて濡るゝ
ゆへ止む、こんぜの運動の模擬なり此の
活々たる氣血を運らし、全体をまはし
運動するの効あるべし、西洋視山
[illegible]の寿也此の運動活々たるよし続
山人の自白なりと

◎地の底から人形

目下電話の地下線工事中にて二丈程掘下げ居る下谷區北大門町八番地々先に於て去る廿二日午後より圖の如き人形やら恵比壽大黒等續々出るより近邊の大評判となり小供等は之を獲んと爭ふて群集し混雜一方ならず一昨夜までに

▲天神タテ一寸七分　ヨコ一寸九分▲女タテ二寸二分、ヨコ二寸▲大タテ一寸九分、ヨコ一寸三分

既に一萬餘を掘出せし由古老の語る處に依れば此場所は以前上野東叡山御用の人形師某の居宅にして明歷年間彼の有名なる本郷丸山の振袖火事に燒けたる儘なれば今後種種の佛像なども出るならんと

◎小人形の掘出しもの

今度下谷徒士町へ電話交換局が出來るに就て、地下電線埋設の爲め此頃上野町と上野廣小路町の四ツ角（湯島切通より厩橋へ通ずる新道）の所を、地下一丈五尺程も掘つて居るが、不思議あのゝ一丈も掘下げて行くはずに、大凡そ離人形位の大きさの土人形が現はれ出た、最初ゝ一日に七八個であつたが、日增に殖えて來て、昨今でゝ數十個の多きに及んだとある、然しながら無頓着の工夫達の事であるから、別段氣にも止めず、土塊と一つにして置いた所、右の人形ゝ胡粉も剝げず、彩色も鮮色しきにある所から、近所の子供達が拾つて玩弄んで居た處、何日か此評判が高くなつて此人形を神棚に祀つて置くと幸福が來ると、愚にも付かぬ事を言觸らした者があつて、數寄屋町同朋町邊の數者が毎日人形を拾ひに來る、さうあると工夫も漸く慾が出て一個五六錢位で賣渡して居る、此事を程遠からぬ美術學校の生徒の多數が聞込んで、參考の爲め夜間人形を拾ひに來るやうになり、夜ゝ工夫が居ないのを幸ひ、多數の者が集つて來て掘上げてある土を崩し、人形を搜してゝ奪ひ合つて爭ひを始め、丸で戰のやうな騷ぎなので毎夜下谷署から數名の巡査が出張し、交換局よりも役員が出張して警戒をして居る始末であるが、此人形に付て樣々の說が起つて居る、胡粉なぞの模樣から想像をすると、凡二百年程前の製作である事だけゝ鑑察をする事が出來る、然し進んで此邊の古老に就いて聞くと、丁度今發掘して居る邊に人形屋があつて、中々立派な構へをして居たものであつたが、明和九年（今より百三十年前）目黑行人坂松平近江守の邸から出火して、東ゝ佃島北ゝ千住大橋邊まで延燒した大火の折、土藏を落した爲め其人形屋ゝ零落したと云ふ話しがあれや、今度掘出した人形ゝ即ち是れであらうとの事、近頃珍とせべき語り草のまくを

東京博愛製

以下全て

白紙